

厚生労働科学研究費補助金  
 (難治性疾患等克服研究事業(免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業))  
 分担研究報告書

日本人成人における NSAIDs 過敏症(いわゆる NSAIDs アレルギー)の全国実態調査

研究代表者 谷 口 正 実 国立病院機構相模原病院臨床研究センター病態総合研究部 部長  
 研究協力者 福 富 友 馬 国立病院機構相模原病院臨床研究センター診断・治療薬開発研究室 室長  
 伊 藤 潤 国立病院機構相模原病院アレルギー科 医師  
 渡 井 健 太 郎 国立病院機構相模原病院アレルギー科 医師  
 南 崇 史 国立病院機構相模原病院アレルギー科 医師  
 林 浩 昭 国立病院機構相模原病院アレルギー科 医師  
 秋 山 一 男 国立病院機構相模原病院臨床研究センター センター長

研究要旨:

(背景)薬剤過敏症(いわゆる薬剤アレルギー)や NSAIDs 不耐症や NSAIDs 過敏症(いわゆる NSAIDs アレルギー)の日本人での頻度は不明であり、その副作用の程度や症状、原因薬剤についても明らかにされていない。すでに我々は、喘息などの有症率などの疫学調査において、インターネットを用いた正確かつ精度の高い調査方法を確立した。

(方法)対象:インターネットによるアンケート調査で、都市部および地方部に住む 20 歳から 54 歳まで約 1 万人を対象とし、5 歳刻みに男女別に分類し、それぞれの階級より 200 人ずつランダムに抽出した。「何らかの薬剤アレルギーがありますか」との問いを行い、ある場合は、さらにその原因薬剤、誘発症状、程度などをアンケート形式で調査した。さらに肥満などの危険因子との関連を検討した

(結果)今回初めて全国 Web 調査により NSAIDs アレルギー(自己申告)の頻度と内容が明らかになった。OTC 薬と処方薬との頻度は同程度であり、アスピリン(パファリン含め)が多く、誘発症状は皮膚症状が約 8 割、呼吸器症状が 2 割であった。

また肥満が危険因子であることが示唆された。

(結論)全国の一般住民対象にした Web 調査により NSAIDs 過敏症は 20 歳代で約 6%、30 歳から 50 歳代で 15%あり、肥満患者に多いことが判明した。また原因薬剤はアスピリンが 40%を占め、83%が皮膚症状、20%が呼吸器症状であった。

図 1: Prevalences of self-reported drug allergy to Antibiotics and NSAIDs

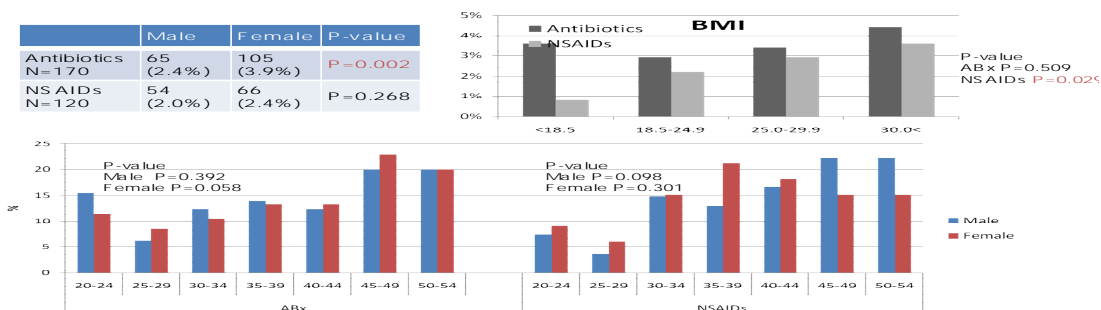


表 1 : 原因 NSAIDs と誘発症状  
アスピリンが約 40% 主体は皮膚症状

Prescription drugs	No. (%)	OTC	No. (%)		Antibiotics N=170*	NSAIDs N=120*	P-value
アスピリン	16 (18.6)	ノーシン	6 (6.8)	route			
ロキソニン	11 (12.8)	イブ	10 (11.3)	p.o.	146 (83.9)	110 (87.3)	P=0.132
ボルタレン	6 (7)	バファリン	28 (31.8)	i.v.	25 (14.3)	10 (7.9)	P=0.101
インダシム	1 (1.2)	セデス	6 (6.8)	Suppository	0 (0.0)	3 (2.4)	P=0.038
ハイベン	1 (1.2)	ナロンエース	4 (4.5)	others	3 (1.7)	3 (2.4)	P=0.665
セレコックス	0 (0.0%)	バプロン	3 (3.4)	Symptomatic organ			
Others	10 (11.6)	リングル	2 (2.3)	Cutaneous	131 (77.1)	99 (82.5)	P=0.260
Unknown	41 (47.7)	Others	2 (2.3)	Respiratory	35 (20.6)	24 (20.0)	P=0.903
		Unknown	27 (30.7)	Gastroenterol	34 (20.0)	18 (15.0)	P=0.274
				Cardiovascular	24 (14.1)	12 (10.0)	P=0.295
				Number of symptomatic organs			
				1	114 (72.6)	83 (76.9)	P=0.705
				2	27 (17.2)	17 (15.7)	P=0.688
				3	13 (8.3)	6 (5.6)	P=0.370
				4	3 (1.9)	2 (1.9)	P=0.950

### A. 研究目的

(背景)薬剤過敏症(いわゆる薬剤アレルギー)や NSAIDs 不耐症や NSAIDs 過敏症(いわゆる NSAIDs アレルギー)の日本人での頻度は不明であり、その副作用の程度や症状、原因薬剤についても明らかにされていない。すでに我々は、喘息などの有症率などの疫学調査において、インターネットを用いた正確かつ精度の高い調査方法を確立した。

### B. 研究方法

対象:インターネットによるアンケート調査で、都市部および地方部に住む 20 歳から 54 歳まで約 1 万人を対象とし、5 歳刻みに男女別に分類し、それぞれの階級より 200 人ずつランダムに抽出した。

「何らかの薬剤アレルギーがありますか」との問いを行い、ある場合は、さらにその原因薬剤、誘発症状、程度などをアンケート形式で調査した。さらに肥満などの危険因子との関連を検討した。

(倫理面への配慮)

すべての Web 調査対象から、調査前に同意を

とっており、個人情報情報は暗号化され、いっさい含まれていない。当院での倫理委員会での承認済みである。

### C. 研究結果

NSAIDs 過敏症は 20 歳代で約 6%、30 歳から 50 歳代で 15%あった。肥満患者に多かった(図 1)。また原因薬剤はアスピリンが 40%を占め、83%が皮膚症状、20%が呼吸器症状であった(表 1)

### D. 考察

・今回初めて全国 Web 調査により NSAIDs アレルギー(自己申告)の頻度と内容が明らかになった。

・OTC 薬と処方薬との頻度は同程度であり、アスピリン(バファリン含め)が多く、誘発症状は皮膚症状が約 8 割、呼吸器症状が 2 割であった。また肥満が危険因子であることが示唆された。

・今回の調査により、NSAIDs アレルギー患者は一般住民にも 10%以上存在し、今後その対策が必要と考えられた。

## E . 結論

全国の一般住民対象にした Web 調査により NSAIDs 過敏症は 20 歳代で約 6 %、30 歳から 50 歳代で 15%あり、肥満患者に多いことが判明した。また原因薬剤はアスピリンが 40%を占め、83%が皮膚症状、20%が呼吸器症状であった。

## F . 健康危険情報

なし

## G . 研究発表

### 1 . 論文発表

「総括研究報告書」

G . 研究発表 1 . 論文発表 参照のこと

### 2 . 学会発表

「総括研究報告書」

G . 研究発表 2 . 学会発表 参照のこと

## H . 知的財産権の出願・登録状況( 予定を含む )

### 1 . 特許取得

なし

### 2 . 実用新案登録

なし

### 3 . その他

なし